進学塾アペックス

アペックス便り９月号

令和４年９月吉日

おしらせと今月の行事予定

※コロナ感染推移の高止まりに注意！

コロナ感染が新学期を節目に増加予想され、特に低年齢層の増加が顕著です。予防意識の低下と感染予防の履行が不十分なので、再度意識を高め、感染予防を徹底させましょう。自宅療養等の授業欠席を強いられるのは、大きな損失になりますので気を付けましょう。

今月の予定

○９月３日…全国テスト
※小６&中３受験生のみ

●9／30, 10/1は全休講日
※年間調整日の為

◆前回のつづき　…両親の戦後…
～マイノリティーとしての私の誕生～

塾長の呟きブログ

父は済州島で生を受け、併合下の戦前から日本と済州島を祖父母と行き来しながら、日々を懸命に生きていた。日本の学生として出兵の[赤紙]を貰ったその年に終戦を迎え、父は奇跡的に死を免れて解放された。済州島の動乱と、朝鮮戦争の勃発により、家族を守るために直ぐの帰国は諦め、まずは経済的安定を優先させて日本に留まった。父の無念は、父が尊敬して止まない実質の育ての親ともいうべき、私の曾祖父[故郷の村の里長をしていたが、済州島四・三事件で村を代表して処刑された…]の墓参りに、再び故郷の土を踏むことなく日本で他界した祖父を、終戦後も故郷に連れて帰る機会を得ず、日本の土に埋葬せざるを得ない結果になったことだ。
二十歳で結婚し、一家を支える父に、朝鮮戦争で焦土化した祖国が、分断国家として停戦を迎えて、在日一世として日本に留まりながら懸命に家族を守り生計を営むなかで、帰国の時期を逸した理由は、祖国が分断されたことと、日本の戦後復興のスピードがあまりに急展開で経済復興したのも一因に挙げられる。当時の在日社会は、分断された祖国の傀儡政権のいずれかに属する必要が有り、故郷は韓国の済州島だったが、済州島動乱によって無念の死を遂げた曾祖父の一件もあって、父は総連に属する判断をすることになった。後にこの判断が、朝鮮籍になった故に、日本との断交から40年近くも韓国の故郷への里帰りを遮断する運命になった理由である。
加えて、父が貧困から脱却する野心と計画に、焦土化した祖国よりも日本での生活基盤の確立の方がその先にある父の夢に繋がると、先見の明を働かせたのも里帰りを遮断させた一因になったのは否めない。生きる為の自然の成り行きで、当時の在日社会では珍しくなく、大家族を支える父にすれば当然だった。
身体も大きく[185センチ、90キロ]、実直で統率力もあった父は、螺子、ボルトを製造する数人の町工場の工場長として仕事を任され、大きな信頼を得て意欲的に働いた。
お世話になった老社長の下で懸命に生きていたが、跡目のない老社長が廃業する前に経営権を譲り受け、工場を買い取り青年社長として再出発したのが25歳ごろと聞いていた。長男を亡くした後に、長女、次女と恵まれ、何とか安定的な経済力を得るためのチャンスとばかりに、父は全財産を叩いて人生を賭ける勝負をしたのだ。
父の予感通りに、日本の経済復興は猛スピードで駆け上がり、鉄鋼関連の製造業の部品供給の位置づけだった父の業界も例に漏れず、作れば作るだけ売れたようで、機械化されていなかった職人の時代だった故、従業員数に比例して生産量は上がり、やがて30人ばかりの職人さんを抱えるぐらいに成長して、青年社長の勢いは日本の経済復興の流れにもしっかりと乗ったようだった。一家が安定し始めた頃に、次女に続いて私が誕生するのだが、物心ついた幼児期の生家の記憶は今でも鮮明に覚えている。
大阪の東成区の近鉄鶴橋から疎開道路を超えて、今里ロータリーまでの[大成通り]で私は産声を上げた。長男を亡くして三人目で待望の男の子ということもあって、父を筆頭に祖父母の喜び様は大変だったようだ。当時の韓国社会は伝統的な儒教精神を引き継ぐ男系社会で、長男が家督を継承するのが常識的に位置づけられており、私自身は祖先から数えると、何とその継承を引き継ぐ67代目になるのだ。
実際に韓国社会のどの家庭も祖先の系譜[世譜、族譜、チョッポ]という記録を持ち、私の始祖は【密城朴氏】で、出身地域から脈々と私の67代まで、記録伝承されている。
更に父が済州島に入島して16代目になるので、私は済州島を故郷に持つ17代目の家督者として記録されている。66代目の継承した父の前には在日の記録は無く、父は在日1世として渡来し、私が在日2世として、祖国を朝鮮半島に、故郷を大阪と済州島に持つマイノリティーとして、日本で誕生した[宿命]を背負ったのだ。私の在日感情は、両親の宿命の継承の上に成立するので、私の[宿命]の核をなすアイデンティティーは、韓国社会と日本社会のダブルの感情で構成され、ダブルスタンダードを生まれながらに持ち得た私は、幸運で良かったと自負している。韓国での当たり前が、日本ではマイノリティーとして位置づけられる在日の存在は、在日自身の生き方と考え方次第で大きく変わるからだ。
生みの親の[祖国]の顔を知らず、育ての親の[日本]への感謝は当然ながら、生みの親を知りたいという感情に駆られる衝動にも近い複雑な想いを、日韓の二国を重ねてダブルに祖国を持てる在日として生きることで、自分の[運命]をマネジメントする為には、やはり『超ラッキー』と、マイノリティーとしての自覚と覚悟を鮮明にして生きる方が自然だからだ。
在日二世として生まれ、幼年期から青年期へと成長する過程で、韓国社会からも日本社会からも浮いた存在を地につけるのは、自分自身で足をしっかり地につけるしか術はなく、両足があるならそれぞれの足を両国に下ろすことができる[ダブルの幸運]と捉えて生きていくのが賢明だろう。しかし、もの心がつき成長する過程で、この[宿命]を絶対肯定しながら全てを甘受する覚悟ができるまでは、理不尽な体験や不条理な世界を垣間見ながら、